

「思わぬこと」から遊びが拓く

白梅学園大学附属白梅幼稚園



赤いトマトは採っちゃだめ



のり巻き、抜けた



今度は別々にしよう



新幹線は整備中



持ってみたら軽かった



煙は立つけど火はおきない



売った車が返された



タイヤは動いていない

- 本冊子は 2021 年度ソニー幼児教育支援プログラムに応募した論文です。
- 冊子の形式に応じてページ番号を整えました。

も く じ

I. 研究への取り組み	2
1. 取り組みの背景	2
2. 研究主題『『思わぬこと』から遊びが拓く』	2
3. 研究の方法	3
(1) 事例について	3
(2) 分析と考察の観点	3
II. 実践事例と考察	4
1. 緑のトマトは採っちゃだめ、赤いトマトは採っちゃだめ〔3歳児〕	4
2. のり巻きの中身、抜けちゃった〔3歳児〕	6
3. 今度は別々にしよう〔4歳児〕	8
4. 新幹線かがやき、ただ今、整備中〔4歳児〕	10
5. 手で持った感じと重さが違う〔5歳児〕	11
6. 煙は立っけれど、火はおきない〔5歳児〕	12
7. 車は続くよ、いつまでも	15
A. 丁寧に作らないと返される〔5歳児〕	15
B. 自分の車も動くようにしたい〔3歳児〕	18
III. 総合考察	19
1. 「思わぬこと」から遊びが拓く過程	19
2. 保育者の援助	21
3. 「思わぬこと」から拓く「科学する心」	21
4. 今後の課題と方向性	21
研究代表・研究同人	21

I. 研究への取り組み

1. 取り組みの背景

十年前に立ち返ったとき、2021年の社会の姿を予想できたであろうか。

この十年、情報通信分野におけるネットワークの通信速度は格段に向上し、コミュニケーションの仕方は大きく変わった。スマートフォンは日常生活に欠かせないものとなり、眼前の出来事を見知らぬ人にまで、即時に発信することができる。遠方の知人や家族の消息も同時刻に双方向的に知ることができる。オンラインでの授業や会議などが普及し、対面でなくても公的な対話が可能になった。

一方で、科学技術が進展しても災害からはなかなか逃れられない。十年前に、十年後の人類がパンデミックにさらされることなど予測し得ただろうか。数十年に一度、百年に一度と言われる豪雨災害がこれほどまでに頻出することに、注意喚起を促すことができたであろうか。

現代社会において、市民レベルではもはや十年後すら、何に直面しそうか予測することは難しい。いわゆる「不確実性」に満ちた時代に、子どもたちが先行き不透明な社会で自らの人生を切り拓こうとするのに、私たち保育者や教育者はどのような経験を提供したらよいのだろうか。「確実であること」に固執せず、「不確実であること」を前提にすれば、自分にとって、うまくいかなさや予想外のことなど「思わぬこと」に出合うことは必然ともいえる。

もしかしたら、これまでも「思わぬこと」に私たちは出合っていたかもしれない。しかし、手堅さを追い求めている社会では、それは失敗として扱われ、見て見ぬふりをされていたかもしれない。現代社会のように、不確実性が可視化されているからこそ、「思わぬこと」が見えやすくなっているかもしれない。

幼児教育の現場で、子どもが自らの遊びを創ろうとする時、「思わぬこと」にしばしば出合う。子ども自身にとっても、子育てをする大人にとっても、子どもが育つ過程では「思わぬこと」はそこここにある。であれば、幼稚園などにおいて、「思わぬこと」に子どもが出合い、仲間と共にそれを受けとめ、「思わぬこと」から予想していなかった果実を得ることに、保育者として立ち合えないだろうか。このような願いに基づき、本園では本研究『思わぬこと』から遊びが拓く」を立ち上げた。

2. 研究主題「『思わぬこと』から遊びが拓く」

子ども自ら遊びを創る時、子どもは「こうしたい」という思いをもっている、予想通りに進まないどころか、思いもよらない出来事や事象にしばしば出合う。それは、予想をしていない、あるいは、予想とは異なるという「予想外のこと」であったり、懸命に取り組んだのに成果が得られないという「不本意なこと」であったり、習慣から「逸脱すること」であったりする。「予想外のこと」には、思い込みが質されることもあれば、仮説通りにいかないことなどが含まれる。また、結果的に「成果」となるような肯定的なこともあれば、「失敗」などの否定的なこともある。「思わぬこと」に出合うと、驚きや喜び、落胆などの感情をしばしば伴う。

「思わぬこと」に出合う前提には、別のことを「思っていたこと」がある。「こうなるとは『思わなかった』、というのは、こうだと『思っていた』から」としばしば思考する。これは「思わぬこと」に出合うことによって、それまで自覚したり意識したりしていなかった「思っていたこと」が可視化されるからだともいえる。つまり、「思わぬこと」に出合うことには、「思っていること」が先行するのである。

幼児教育における遊びにおいては、「思わぬこと」との出合いは、それまでの予想や思い込み、仮説を見直す機会となるだろう。「思わぬこと」に出合うことで、それまでの想定とは異なる遊びが「拓く」可能性があ

と思われる。それまで「思っていたこと」が「思わぬこと」との出会いによって、別の選択可能性が創出される。それを遊びに活かすことによって、新たな遊びが展開されるだろう。本園では、「思わぬこと」を受理、そこから別の見方や対象との関わり方を選択し、「思わぬこと」との出会いによって当初とは異なる見方や遊びに誘われることを「遊びが拓く」としたい。

以上より、本研究においては、「思わぬこと」との出会いで可視化される「思っていたこと」と、「思わぬこと」、そして「思わぬこと」から展開する遊びが「拓けたこと」の連鎖のなかで「思わぬこと」を捉えていく。すなわち、「思っていたこと」－「思わぬこと」－「拓けたこと」の連鎖が、探究を深め、「科学する心」を導くと考える。

これまで、「思わぬこと」とその後の展開は、しばしば「試行錯誤」という言葉で総称されてきた。しかし、今日、幼児教育における「試行錯誤」は適用範囲が広くなり、便利に使われる一方で、本来の意味を見失いつつある。本研究においては、「思っていたこと」－「思わぬこと」－「拓けること」の連鎖で捉えられる事象の一つとして、すなわち本来の意味に絞って「試行錯誤」を用いていく。

3. 研究の方法

(1) 事例について

白梅幼稚園は、子どもがそれぞれの興味や関心に基づいて、自ら遊びを創り出す「自由遊び」を中心に、保育を実践している。子どもの「社会性」「主体性」「創造性」を育むことを園の方針とし、半世紀以上、この方針は継承されている。子どもが事物や人に触発されて興味を喚起し、それを試したりやり直したりして、自分の世界を広げていく姿は、園のあちこちで展開されている。

本研究においては、事例の選択は以下の観点から行った。

- ①自由遊び場面において、子どもが自らの関心や興味から遊びを展開させていること。
- ②その遊びの過程に、「思わぬこと」に相当する出来事が含まれていること。
- ③何に関して「思わぬこと」が起きたのか、事例によってその異なりが示せるようにすること。
- ④「思っていたこと」－「思わぬこと」－「拓けたこと」の連鎖に探究や「科学する心」が表れるものであること。

(2) 分析と考察の観点

分析については、「思っていたこと」－「思わぬこと」－「拓けたこと」の連鎖を取り出し、記述した。それぞれの観点は以下の通りである。

- 1)「思っていたこと」:「思わぬこと」に先立つ、子どもの見方や予想、願いのこと。
- 2)「思わぬこと」:遊びの過程で出会う、子どもにとっての予想外のこと。(前項を参照)
- 3)「拓けたこと」:遊びや出来事が展開し、気付いたり、考えたり、試したりするなど、新たな展望を得たこと。

分析は次の手順で行った。まず、事例から「思わぬこと」を抽出した。次に、それに先行する「思っていたこと」を取り出した。さらに、「拓けたこと」として「思わぬこと」から展開した遊びについて記述した。

次章の各事例において、遊びのエピソードは黒色の野線で囲ってある。右欄に上記のように抽出した「思っていたこと」「思わぬこと」「拓けたこと」を記述している。一連のものは同じ丸数字を付している。「思わぬこと」については、エピソード記述中、該当箇所の下線を付している。

一連のエピソードごとに、考察を記述した。考察においては、「思わぬこと」を中心に、遊びの展開の読み取りについて示している。

Ⅱ. 実践事例と考察

1. 緑のトマトは採っちゃだめ、赤いトマトは採っちゃだめ 3歳児 2021年4～7月

(1) 赤いトマトがなくなった

4月下旬、保育室前の花壇にミニと大玉の2種類のトマトの苗を植えた。黄色い花が咲き小さい実がつくと、苗に水をあげる子が現れた。苗が成長すると「こ～んなに大きくなるかな？」と手を高く伸ばして期待する姿もあった。緑色の実が大きくなると、実を手で触ったり、匂いを嗅いでみたりしていた。

6月下旬、ミニトマトが赤く色づいてきた。朝、「明日食べようね」と子どもたちと楽しみにしていたら、その日の午後、「赤いトマトがない」と子どもが駆け込んできた。肝心のトマトが枝には見当たらない。「なんで？」「風で落ちちゃったんじゃない？」と子どもから声上がる。保育者が「どうしたらいい？」と問いかけると、「大きなシートをつけたらいいんじゃない」とA児がつぶやく。それを聞いたB児、C児は一緒にシートを探しに行く。園で保管していたネットを保育者が見つけ、ネットを留める長めの木の棒が必要であることを伝えると、二人はそれぞれに「これは長い」「これもある」と枝を探してきて、ネットに刺し始めた。二人は留め終わると「これなら採られない」と満足気に話す。D児が「いないいないばあを描く」と言って、プラスチック容器のふたに絵を描き吊り下げた。



思っていたこと①

- ・赤くなったトマトを食べたい。
- ・枝から採れないでほしい。

思わぬこと①

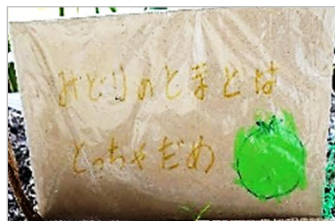
- ・赤いトマトがなくなった。食べられない。

拓けたこと①-1

- ・実が採れないように、ネットを張る。
- ・鳥にも分かるように絵を描く。

拓けたこと①-2

- ・採られないために、もっと工夫をしよう。



朝、E児が赤くなっているトマトを見つけた。「看板を作ったらいいんじゃない」「二ついるよ」「緑のトマトは採っちゃだめ」「赤いトマトは採っていいよ」と話す。聞いていた子どもたちも集まってきて、2種類の看板を保育者と作る。

見ていたF児が「かかしを作ろう」と言い出す。理由を尋ねると、「米や野菜をとられないため。顔を作ろう」と話す。けれども、他の子どもたちは「かかし」が何かは分からない。そこで、「調べてみよう」と本を探してみるが見つからない。パソコンで調べると「これだ!」とF児が見つけ、仲間と共有し合う。

「体もいる」「こ～んな形」と体で表し、かかしを作り始める。紙片を丸めてビニール袋をかぶせ頭部を作る。片面に飽き足らず、両面に目と口を描く。さらに、身体部分の木の枝を探しに行き、枝と頭部を組合せる。出来上がると花壇に立てに行く。1mくらいの立派なかかしだ。部屋で見ていた数人の子どもたちも「私も作りたい」「私も作る」と集まってきて、それぞれに小さいかかしを作り、トマトの近くに立てていた。



思っていたこと②

- ・かかしと看板があれば採られない。

思わぬこと②

- ・またトマトがない。

拓けたこと②

- ・メッセージが誤解されないように、看板を書き直そう。

(3) 赤いトマトがまた、なくなった

かかしと看板を立て一安心していた翌日、食べたかった赤いトマトがまたなくなっていた。なぜか。子どもたちによれば『赤いトマトは採っていいよ』と書いたから』とのことだった。確かに、第三者には赤いトマトの採集を許可するメッセージを示していた。再び、子どもたちと考え「あかいとまとはとっちゃだめ」に書き換え、「X(バツ)もいる」と書き足して元の場所に戻した。さらに、C児はトマトに触れにくくするために、集めた木の枝を刺して囲いを作っていた。

考察 [1]

苗の変化に気づいてから、子どもたちがトマトの成長や実が赤くなることに、期待をするようになった。一人ひとりの関心が、少しずつ「自分たちの」トマトであり、いずれそれを食べたいという方向に変わり、トマトがなくなるたびに「どうしたらいいのか」、対策を考え、実行した。友だちの話しに共感し、仲間と一緒に工夫するようになり、「みんなの」トマトを守ろうとする愛着心もでてきた。「なくなる」→「考える（次への期待）」→「行動する」という循環を経験し、子どもたちが主体的にとトマトと関わるようになっていった。



(4) 緑のトマトジュースと赤いトマトジュース作り

6月上旬、緑のトマトが赤くならずにもげてしまった。「どうしようか」と話していると、子どもたちは「切ってみる」「ジュースにしたい」と言い出した。実際にトマトを切って匂いを嗅ぐと「くっさい」「葉っぱの匂い」「桃みたい」と様々な感想が漏れる。子どもたちと考えて、すり鉢とおろし金を使い、ジュースを作る。「硬〜い」と悪戦苦闘している。「ジュースだから水をいれよう」と容器に水を加え、再び匂いを嗅いでみる。切った時と感じ方に変化はない。B児が「やっぱり緑のトマトはすっぱくって食べられない。赤くなったら食べられる」と話す。

7月、赤くなった大きなトマトとミニトマトをたくさん収穫した。帰りの会で食べ方を尋ねると、「いっぱい切って食べる」「そのままガブッとする」などの声がある。今までトマトを食べなかったH児が「ジュース飲みたい」と張り切っている。みんなも「ジュース」の響きに魅せられ、トマトジュースを作ることにする。

ではどのように作るのか。家で作り方を聞いてきた数名が「機械で作る」と言う。しかし幼稚園には機械はない。そこで、「種と皮をとって、網に入れて潰す」というG児の案を選んだが、今度はトマトの皮のむき方が分からない。

次の日、お家の人に教えてもらったG児が、皮のむき方を絵に描いてきた。「トマトに×（バツ）して焼いて、皮をむいて、網に入れて潰す」と説明してくれた。保育者からは「トマトを×に切ってお湯をかけると皮が剥けるんだって」と湯むきを提案したが、「だめ!」「トマトがくちやくちやになっちゃう」とB児が言い出し、子どもたちは猛反対した。結局、トマトを焼いて皮をむくことになった。

調理当日、熱くなったフライパンにトマトを入れる。しばらく経つと「トマトが動いてる」「熱いよって言ってる」と子どもたちがつぶやく。皮は無事むけた。トマトをサイの目に切り、ジッパー付きの袋に小分けし、子どもたちの手で袋を揉む。交替しながら揉み続ける。潰れたトマトを袋からザルに移して濾すと、いい感じにジュースが出来あがった。

自分たちで作ったトマトジュースを「おいしい」「ちょっとすっぱい」と言いながら味わい、ほとんどの子が完食した。H児も飲みほし、トマトの果肉も「食べてみる」と挑戦した。半分食べ終え、他児たちから「すごーい」と歓声をもらった。

思っていたこと③

- ・緑のトマトジュースもおいしいはず。



思わぬこと③

- ・緑のトマトジュースはおいしくない。飲めない。



拓けたこと③

- ・赤いトマトでジュースを作る。
- ・作り方を工夫する。
- ・おいしくできた。



考察 [2]

緑のトマトでもジュースにすればおいしいのではないかという期待ははずれてしまった。この失敗をもとに、おいしいジュースへの新たな期待が起き、赤いトマトでのジュース作りへの再挑戦につながった。ジュースの作り方については、3歳児なりの感覚で選択し試行した。最後は赤いトマトへの期待が実を結び、栽培から調理、食事へと至る道筋の手間を体験することができた。子どもたちの「やってみたい」気持ちに保育者も寄り添い、保育者も試行錯誤しながら活動を進めていった。

(1) 抜けてばらばらになっちゃった

軽食にのり巻きが提供される日、その日の午前中に子どもたちののり巻き作りが始まった。制作コーナーに置かれた黒い画用紙（八つ切り $\frac{1}{4}$ ）に、切り揃えてあったプチプチシート（エア緩衝材）を載せて、ある子がぐるりと大きくひと巻きして「のりまき」と言ったことがきっかけだった。

次の日、前日にのり巻き作りに参加していたA児に声をかけると、再び、のり巻きを作りたいと言う。この時は、海苔に見立てた黒い紙と、白飯に見立てた薄手の白い紙、かんぴょうに見立てたこげ茶色の紙を用意した。子どもたちは、前日の軽食でかんぴょう巻きを食べていた。保育者が試しにA児の目の前で紙を重ねくるくると巻き、できた1本物を何等分かに切り分けて、制作過程を見せていた。のり巻きらしくなっていくその様子にA児は目を丸くして見ていた。

いよいよA児が挑戦してみることになった。紙の大きさや巻き方はA児の様子を見ながら調整していった。ぐるりと1本巻き、「できた！」と保育者に見せようとした瞬間、のり巻きの中身がすりと抜けた。「あれえ？抜けちゃう」とA児がつぶやいた。

その後、テープで留めてみたものの、保育者の手順のように、完成した1本ののり巻きにはさみを入れると、のり巻きの中身が飛び出しバラバラに分解されてしまう。その度にテープで留めながら直していく。いくつも繰り返し作っていくうちに、太さに気をつけながら、慎重にしっかりと巻いていくようになった。

そこへB児が「やりたい」と寄ってきた。この時、のり巻きの具はA児の要望で、キュウリに見立てた黄緑色の紙や、マグロに見立てた赤い紙を加え、その選択肢は三つに増えていた。保育者はB児に「どれにする？」と聞きながら必要な紙と一緒に揃えていく。B児は重ねた紙を見よう見まねでひと巻きしてみるが、中身がストンと抜け落ちる。その様子を見ていたA児はいすから立ち上がり、B児のそばに近づいた。A児は「テープでね、とめればいい」とつぶやきながら、のり巻き一つ分の制作を手伝う。その後、B児は自分でテープを留める箇所を考えながら2本目を作っていた。



思っていたこと①

- ・のり巻きに見えるように、きれいに巻ける。
- ・のり巻きは簡単に巻ける。

思わぬこと①

- ・巻き方がゆるく、中身が抜け落ちる。
- ・切り分けると中身がバラバラに分解してしまう。

拓けたこと①

- ・太くなりすぎないように巻き方に気を付ける。
- ・中身が分解して抜けたりしないように、こまめにテープで留める。



考察 [1]

この事例では、子どもの直観的な制作を契機に、のり巻きの素材を見立てた色紙を層に重ねて巻くことと、巻いたものを切り分けて断面が見えるようにすることを、保育者から提案した。紙の色や、重ねて巻き終えた形状から、制作物がのり巻きに見えやすいという特徴がある。お皿に並べれば、軽食で口にしたりのり巻きのようなものもある。それが魅力となり、子どもの制作意欲を喚起したと思われる。A児は日頃から好んで何かしらの制作をしている。保育者の手際を見て、のり巻き作りに取り組んだものの、実際はすぐにはうまくいかず、何度も中身が抜けてしまった。A児は失敗を通して、技術的なコツがあることに気付いた。自らの気づきが意識化され、B児を手助けするという対応がもたらされたと考えられる。

(2) 落ちないよ

A児と保育者がのり巻き作りをしているとC児が「何しているの？」と近づいてきた。「いいもの、作っているんだよね？ Aちゃん、見せてあげたら？」とA児に促すと「のり巻き、作っているの」「(中身が) 取れちゃうからテープで留めた」と言って、自分の制作物をC児に見せた。

のり巻き作りに意欲をみせるC児に対して、A児は、制作手順を見せるかのように、紙を重ねて黙ってのり巻きを1本作り始めた。C児はその様子をじっと見つめている。A児が作り終わると、C児は分かっているかのような表情で自分も作り始める。A児と同じように紙を巻こうとするが、うまく巻ききれず、紙が開いてしまう。「失敗しちゃった…」とつぶやくC児に、「もう1回やればいいよ」とA児が言葉を返す。気を取り直して再び挑戦するC児は、紙を少し押しつぶしながら巻き始めた。今度は巻ききることができたが、一口サイズに切り分けようとしたところで中身がバラバラになった。C児は散らばった紙を集め、のり巻きに見えるように巻き直し、テープで留めていった。

C児は、次に具となる紙を細かく切り始めた。C児は細かく切った紙がこぼれないようにゆっくりと巻いていき、両端をテープで丁寧に留めた。出来上がると「見て、できた！ (中身が) 出てこないよ」「テープ、貼ったら落ちなかった」と満足そうな表情で保育者に見せた。

A児、B児、C児は作ることに一生懸命になっていた。のり巻きがいくつか出来あがったところで、保育者がままごとコーナーのお皿を取り寄せ、のり巻きを載せた。「どう？」と見せると、「わあ、いい！」という声があがり、みんなで食べることになった。テラスにテーブルを出し、お皿を並べていった。

思っていたこと②

- ・A児のように、簡単にきれいに巻ける。

思わぬこと②

- ・うまく巻けない。
- ・切り分けると中身がバラバラになってしまう。

拓けたこと②-1

- ・紙をつぶし気味に巻く。
- ・巻いたら両端をテープで留める。
- ・バラバラに分解されたものは、テープで留めていき、見た目のり巻きに見えるように手直しする。

拓けたこと②-2

- ・のり巻き作りに参加した3名で、食事のごっこ遊びをする。

考 察 [2]

A児は、C児にやり方と技術的な要点を教え、うまくいかないC児を励ましている。A児の行動は、自分が技術的に苦労した経験ゆえにとられたように思う。丁寧に巻き上げたつもりでも中身が抜け落ちるといううまくいかなさに3歳児なりによく向き合っていた。C児が投げ出さず作り続けられたのは、のり巻きらしいのり巻きを作りたいという願いと、隣で試行錯誤しながらのり巻き作りをしているA児の存在が大きい。

C児は、新たにのり巻きの具の部分の細かく切り始めた。これは、巻きにくいと感じたからなのか、食べたことのあるのり巻きは具が切ってあるように感じてそれを再現しようとしたからなのか、その真意は不明ではある。しかし、3歳児なりに試行錯誤して作り変えていること自体に、モノへの独自の関わり方をうかがうことができる。

保育者としては、のり巻き作りに関わりながら、どのように収束していくのか思いをめぐらせていた。保育者による「作ったものをお皿にのせる」という動きは、子どものイメージを広げ、さらなる遊びを拓くことを期待してのことである。この日はテーブルを囲み、食事のごっこ遊びで終結しているが、後日、A児とC児は、この時に作ったのり巻きを用いて、回転ずしごっこやコンビニ風のお店屋さんごっこを展開している。苦労して作り上げたのり巻きは、遊びを構成する大事な品目の一つになった。



(1) サナギが落ちた

7 月、A 児が枝と共に蝶のサナギを持ち込んだ。毎朝、登園すると「まだかな」と確認するが、なかなか変化がない。見るだけでなく触ったりする子もいる。「触らない方がいいよ」と注意する子もいたが、案の定、サナギが枝から落ち、「先生、チョウチョ(サナギのこと)が落ちた」と保育者を呼んだ。保育者もどうしたものか悩んでいたその時、A 児が母親と共に登園した。

サナギが落ちてしまったことを伝え、「先生、そういう時はボンドでつけることもできるんですよ」と A 児の母親が教えてくれた。言われるがまま、切った段ボールを斜めに虫かごに入れ、そこにサナギをボンドでつけ、事なきを得た。

その後も 2 回ほど落ちたが、その度にボンドで慎重に取り付け、羽化を待った。7 月には遂に羽化に成功し、空高く舞い上がっていく蝶の姿にクラスで歓声をあげた。子どもたちはこの蝶の羽化がきっかけに虫への興味を深めていった。

思っていたこと①

- ・サナギは変化がなく枝から落ちたりしない。

思わぬこと①

- ・サナギが枝から落ちてしまった。もう羽化できない。

拓けたこと①

- ・サナギを段ボール紙にボンドで付けたら羽化した。



(2) カマキリに餌をあげたい

それまで虫が苦手だった B 児は、部屋に虫が入ってくるだけで大声を挙げて逃げ回っているほどだった。9 月になり、C 児が、カマキリを発見した。クラスで飼いたいということで、餌を探すことになる。カマキリが何を食べるのか尋ねてみると「バッタ」「蜂」「チョウチョ」「セミ」「カエル」「タガメ」「ハム」が挙がる。生きている虫しか食べない、ということを知っている子もいた。

その日からカマキリのための虫取りが始まった。草むらの中に入り、次々とバッタを捕える。B 児も餌をあげたい一心で、必死にバッタを探し、大人や子どもから手渡しされれば、恐る恐る触れるようになっていった。

しかし、この時期は寒暖差が大きく、また畑のために草刈りをしてしまったこともあり、バッタがなかなか見つからなくなっていった。子どもたちの虫取り熱もだんだんと冷めていく。

翌週になり、B 児がバッタを持って登園してきた。「家で捕まえたから持ってきた」とカマキリにあげるために持ってきてくれた。心の片隅にクラスの「カマキリ」の存在があり、バッタを見つけたことで、このカマキリを思い出し、園に持ってきてくれたのだろう。

思っていたこと②

- ・カマキリの餌になる生きた虫を次々と捕まえられる。

思わぬこと②

- ・思うようにバッタを見つけられず、捕まえられなくなった。

拓けたこと②

- ・子どもなりにカマキリのことに関心を持ち続けていた。

考 察 [1]

チョウやカマキリに関心をもった子どもは、触ったり餌をあげたりして、虫に愛着を深めていった。それは、虫を生きながらえさせることへの関心も引き寄せた。サナギを触ることや餌を与えることといった自らの行為が、目の前の虫の生死に関わることを子どもたちは理解していった。

B 児は、虫が苦手であったが、クラスのカマキリのために必死に餌を探していた。降園してもカマキリに思いを馳せ、餌を園で見つけられなくなっても、家などで捕まえて持参するなど、生き物への関わり方を大きく変えていった。



(3) カマキリと蝶

7月の経験から、子どもたちは蝶のサナギを見つけると園に持ち込むようになった。9月末、D児が家からサナギを持参した。「これは、カマキリの餌にするんだ」と言う。確かに、カマキリにとっては餌がないことは死活問題だ。子どもたちは「可哀そう」という思いと、「カマキリのためには仕方がない」という思いの間で、揺れているように見える。その後も連休になると誰かが家に持って帰るなどして、カマキリは大切に飼育され、1ヶ月間クラスで過ごした。

遂に、D児が育てた蝶が羽化した。それに気付いたE児が、登園してきたD児に「蝶が羽化したよ」と声をかけると、「分かった」と羽化したばかりの蝶を、カマキリのカゴの中に入れる。

その場にいた子どもたちは皆、何も言わず、固唾を飲んでその様子を見守った。しばらく餌を食べていなかったカマキリは、最初は動なかったが、蝶が入ってきたことを感知したのか、ゆっくりと動き始め、ついに捕まえた。

その様子を、子どもたちは、じっと見つめていた。

思っていたこと③

- ・カマキリが生きるために餌を見つける。
- ・羽化した蝶はカマキリのいい餌になるだろう。

思わぬこと③-1

- ・サナギから羽化したばかりの蝶をカマキリが捕食した。



思わぬこと③-2

- ・羽化したばかりの蝶を食べた直後に、カマキリが死んでしまった。

拓けたこと③-1

- ・カマキリの願いを思っ、お墓の場所を考える。



拓けたこと③-2

- ・食べられた蝶と、食べたカマキリの両方への思いから、カマキリと蝶が共生できるように考える。

(4) 突然の死

その日の午後、カマキリのカゴを見たC児が「先生、カマキリが死んでる！」と大声を挙げる。駆け寄ると、カマキリが亡くなっていた。

子どもたちは誰しも突然の別れに驚きを隠しきれない。「チョウチョを食べて、お腹壊したんじゃないか」「生まれたばかりの蝶がいけなかったんじゃないか」、子どもなりに色々と思いをめぐらせるが、真相は分からない。

降園の直前、カマキリのお墓を作ることにした。場所は「カマキリがすぐに遊べた方がいい」ということで、草の生える畑の近くに埋めた。

(5) 今度は別々にしよう

11月、園庭でキャンプごっこが始まった。ゴザや段ボールを並べ、自分たちでテントを張り、「水族館も作ろう！」と園庭に工作で作った魚を飾ることにした。B児は「じゃあ、虫も置くことにしよう」と、カマキリを作り始める。何人か仲間が集まり、虫や魚の工作に取り組んだ。

制作した虫や魚をどこに置くか相談していると、B児が「今度は、カマキリと蝶を別にしてあげよう」と言う。D児は「そうだね。今度は、別にして置いてあげよう」と、工作で作ったカマキリは、自分で餌を見つけられるように草むらの中にそっと置いた。カマキリは草むらで伸び伸びと、そして蝶はカマキリや他の虫に見つからないように、木の上で悠々と舞っているようだった。

考 察 [2]

カマキリにとって、羽化したての蝶は生きるために必要な餌である。一方で、蝶は長い時間サナギで過ごし、やっと羽化し、これから羽ばたこうとしている。子どもたちはカマキリを生かしたい思いと、羽化したばかりの蝶を羽ばたかせたいという思いの間で、葛藤していた。「可哀そう」「でも仕方がない」と揺れ動いた一日の結末は、せつかくの蝶の命をもらったカマキリも、その日のうちに死んでしまったというものだった。一日のうちに二重の「思いもよらないこと」に遭遇し、子どもの思いは複雑であった。

しかし、この体験を子どもたちは忘れることはなく、11月のキャンプごっこの過程で、カマキリも蝶も大事なものであったことが表れた。カマキリや蝶と過ごした経験は、制作によって昇華されたように思われる。

(1) 乗るよりもまずは念入りな整備

4 月、「本当に乗れる電車を作りたい」と、A 児と B 児が段ボールを 3 箱引き出した。「かがやきを作るんだ」「青と茶色だから絵具で塗りたい」「縦に 3 つ繫げたい」と二人は A 児の好きな新幹線かがやきを制作した。しかし、完成すると二人は乗らず、整備道具を空き箱で十数個作り、かがやきの車体を繰り返し点検している。

5 月初旬、二人が乗り物図鑑を見ていると、整備風景が掲載されていないことに気が付いた。整備工場の写真を見せると、二人は整備士に着目し、「ヘルメットと手袋と洋服を作りたい」と言い出した。手袋と洋服はビニール袋で、帽子はプラ容器で作ってみたが、実際に装着すると物を掴むのが難しく、動きにくかった。結局、帽子だけを使い、かがやきの保管場所を整備工場と呼び、遊びの拠点としていった。

5 月中旬、二人だけで遊んでいた整備工場にお客を招き入れた。「来る人は 2000 円払ってください」と入場料を取り、お客に道具を紹介した。また、速度の点検の仕方について、B 児が運転手としてかがやきを操作し、A 児が計測器を点検する様子を実演してみせた。整備工場にお客を入れる際には「熱や咳はありませんか」「ちょっと熱を測ります」「熱はないので入ってください」と検温をしていた。また、「新幹線に乗った人の中にコロナの人がいるかもしれないから、次に乗る人がコロナにならないように」と車両にも自ら作った注射を打った。

やがて、B 児が運転手役となったことをきっかけに、テラスでかがやきを走らせるようになった。5 月下旬には、梱包資材によるクッション付きの椅子や、乗務員が連絡を取り合う糸電話など、細かい内装を手作りした。そしてついに「新幹線が完成したから今日はお祝いの日」とクラスの友だちに完成したかがやきをお披露目した。



思っていたこと①

- ・まずはきちんと整備したい。

思わぬこと①

- ・整備士の服装は動きにくい。
- ・安全のために何をするか。

拓けたこと①

- ・速度点検や感染対策、内装、機材などを工夫する。



思っていたこと②

- ・内装を作りたい。

思わぬこと②

- ・内装があると乗りにくい。

拓けたこと②

- ・内装を取り除き列車を運行させた。



(2) 完成したから乗ろう

6 月、車両を園庭に持ち出し、走らせるようになった。せっかく作った椅子は座るとつぶれてしまい、電話もあると乗りにくいからと、全て取り外し、段ボールだけの状態に戻した。物置を駅に、柵をホームドアに見立て、運転手役と、車掌兼駅員役を分担した。ドアは開閉し、発車メロディーが流れた。隣接するマンホールはエレベーターに見立て、「ガタガタガタ、ひゅーん」とかがやきが地下の車庫から上がってくる様子を再現していた。B 児は木材を持って、「いらっしゃいませー、お弁当ですー」「乗りながら食べていいですよ」と車内販売をすることもあった。

(3) 古い車両は博物館展示

6 月下旬、「博物館に展示する」と新幹線車両をテラスに設置した。展示の理由を尋ねると、「古くなったから乗るのは終わったの」「走らなくなった新幹線が見れるんだよ」と言う。解体用の道具を作り、解体を始めようとした B 児を A 児が怒って止める。その後、二人はテーブルで修理し、1 学期が終わるまでかがやきを使い続けた。

考 察

新幹線かがやきへの二人の関心は乗車や運行よりも整備にあり、「整備中だから乗れない」というこだわりを見せた。安全な運行をテーマに点検や内装、感染対策、装備などについて細やかに配慮し、遊びを拓いていった。実際の運行のイメージをもち、車両をめぐる動きや、いくつかの役割を出現させた。さらには廃車後の博物館展示まで想定し、かがやきとの関わりを深めていった。

(1) ジャガイモは軽い

7 月初旬、20 日の「夜の幼稚園」の計画を話し合った。当日の降園は夜 7 時になる。子どもたちは空腹を避けるために、自分たちで何か調理して食べることにした。メニューは、衛生上、火を通すことや皆が食べられる物としてカレーかシチューに絞り込んだ。「両方混ぜたらどんなかな?」「美味しい?」「変な味かも」と想像し、実際に試作することになった。保護者にはルーや食材の提供で協力を頂いた。子どもたちは家庭で話題にしたようで、食材は続々とクラスに届けられた。食材を触っては「おっきい」「これ太い」などと感想を言い合った。

試作は 9 日に行った。食材の重さを計る秤を用意し、作り方を読みあげる。「ジャガイモ 150g」。ジャガイモを一つ手に取り、それぞれに触ってみる。「わっ軽いつ!」「小っちゃい」と感想が漏れる。計ってみるとそのジャガイモは 200g あり、少し切り落とし、150g に調整した。子どもたちは「これっぽちだ」「ちょっとだ」とつぶやく。何度も持ち変えて重さを確認する。お試しのカレーとシチューの「ミックス」は、チーズの匂いが強く、匂いを嗅ぐなど警戒していたが、食べてみると案外美味しかったのか、子どもの多くはミックスを気に入っていた。

思っていたこと①

- ・大きさや見た目から、ジャガイモはそれなりに重いと予想していた。

思わぬこと①

- ・手に取ってみると、ジャガイモは小さくて軽い。



考 察 [1]

試行調理にあたり、人数分の食材の種類や量、ルーの「ミックス」の味や匂いなどに、子どもたちの好奇心が高まった。本物のジャガイモは見た目では「重そう」だが、手に取ると「軽い」。秤で計ると、レシピ指定の量より「重く」、レシピの量に調整すると「小さい」。重さをめぐる、見た目と触感、実測値の違いに子どもたちはさらなる興味を注いだ。調理を通して嗅覚(匂い)や視覚(見た目)、味覚(味)、触覚などの感覚は、予想や計測とは異なることに興味をもち、その興味がさらなる試行や挑戦に子どもたちを向かわせた。

(2) おんなじ!

A 児と B 児が野菜を覗き込む。「この人参とジャガイモ、どっちが重いかな?」「ジャガイモじゃない?」「ええ? 人参の方が大きいよ」と言い合う。秤でそれぞれ計ってみる。「人参もジャガイモも 200 だ」「同じ位だね」と確認すると、今度は、別の野菜を秤に載せ始め、最後には全ての野菜を一つずつ計量した。



その結果、「大きい玉葱がチャンピオンだね」と個々の野菜ではある玉葱の計測値が最も高かった。すると、今度は人参とジャガイモを合わせた重さと、チャンピオンの玉葱の重さを計量し、比べ始めた。人参を 1 本ずつ差し替えたりして、大きい玉葱と同じ重さになるまで、繰り返し野菜の組合せを試す。机の上には組み合わせた野菜が綺麗に並べられていた。

思っていたこと②

- ・人参、ジャガイモ、玉葱の重さは違う。

思わぬこと②

- ・計量したら、人参とジャガイモの重さが同じだった。
- ・大きな玉葱が一番重かった。

拓けたこと①②

- ・野菜を組み合わせたリ差し替えたりして重さを推測、比較するなど探索する。

考 察 [2]

子どもにとってモノを「計量」という行為は、これまでの生活では珍しいことである。最初は秤の針の動きを楽しみ、園バックや鉛筆、タオル、弁当箱、など、手当たり次第、計量していた。続いて、事例のように野菜の重さを計量していった。計量するうちに、見た目と、手で持った感覚と、実測値の違いに関心をもち、個々の野菜全てを計っていた。繰り返すうちに、重さについて比較や推測をし、組合せと分類に移行した。組合せの妙や実測値の事実、思いがけなさや偶然の重なりを楽しんでいった。



(1) 熱くなるが火がおきない

4 歳児の頃から、テントを張ってキャンプごっこに親しんでいた。5 歳児になり、本物の火をおこしたいと枝や石を持ってきて、火おこしに挑戦し始めた。板を立てかけ枝でこすり、火を出そうとしたり、板の穴に枝を挿し、枝を回転させて火をおこそうとしたりするなど、様々なやり方で火おこしに挑戦していた。

6 月のある日、A 児が太い棒を持ってきて、「これ、焼き芋に使いたい」と言う。クラスの仲間に A 児が提案すると、「いいね、自分たちで火をおこして、焼き芋をしよう」と盛り上がり、クラス全体の目標になった。それからというもの、B 児は毎日のように、園庭の隅で火をおこそうと奮闘していた。この日は、いつもの板と枝ではなく、石を持っていた。「火打石っていうのがあるんだって。石で火が出るらしい」と一生懸命、石を叩いてみたり、擦ってみたりするが、火はなかなかおきない。「石は熱くなってる！」と興奮気味に仲間に知らせるが、残念ながら、火はおきず。この日の集合時にクラスの仲間に相談することになった。

「石と石で火が出るって聞いたことがあるんだけど、やってみても火は出なかった」「聞いたことある。火打石」。「石と石がダメなら、石と木なら火が出るんじゃない？」という C 児の提案に、保育者は木端などを用意し、子どもたちと一緒に試してみることにした。擦ってみたり、転がしてみたり、それぞれが思い思いに火おこしに挑戦するが、火にはならない。

思っていたこと①

- ・火は材料を工夫すれば簡単におこる。

思わぬこと①

- ・石と石、石と木の組合せで試しても、火はおきない。

拓けたこと①

- ・石や枝や板は、熱くなる。

(2) 煙は発生した

そこにやってきた D 児が火おこし器の説明を始める。D 児はよくキャンプに行くのだ。「火おこし器でやればいい」と言われるものの、火おこし器の制作は困難だ。このような折、子どもたちの取り組みを聞いて、D 児の父親が手作りの火おこし器を届けてくれた。回し続けるのはなかなか難しいのだが、試していくうちに子どもたちはコツをつかんでいく。毎日、誰かしらが火おこしに挑戦し、その日の様子をクラスで共有するようになっていった。

しかし、肝心の火はおきない。「重さが足りないのかも」と D 児の父親が重りを持ってきてくれる。安定感が出るが、熱くなるだけで、火にならない。

夏休み中、家庭で火おこしを試すなど、保護者も子どもと一緒に、どうしたら火がおきるか、挑戦してくれていた。2 学期になっても、交代で火おこし器を使い、何日も何日もこの挑戦が続いていく。そして、11 月 29 日、園庭で火おこし器を使っていた D 児と E 児が「焦げたにおいがする！」「煙が出てる！」と大きな声をあげる。クラスの子どもたちは次々と集まり確認し、「本当だ～」と大歓声が起きる。

思っていたこと②

- ・火おこし器なら、火がおきるだろう。

思わぬこと②

- ・火おこし器でも火がおきない。

拓けたこと②

- ・挑戦し続けたら、焦げた臭いがした。
- ・煙も出た。

考 察 [1]

様々な素材を組み合わせて火をおこそうとするが、なかなかうまくいかない。火おこし器の登場で再び期待が高まるが、あまり進展はみられない。どの素材も熱くはなるものの、火にはならない。諦めかけている子どもがいる一方で、着実に変化があることを捉え、挑戦し続ける子どもたちもいた。そして、やっと焦げた臭いと煙があがるところまで、行きつく。何としても火をおこしたいという思いが、子どもたちの粘り強さにつながっていく。



(3) 紙に穴が空いた

この日もどうしたら火がおきるか、おのずと話し合いが展開する。「煙が出ても火にならなきゃ、焼き芋はできない」とのF児の声に、煙が出た時の歓声は潜み、先行き不安な雰囲気クラスに広がる。しばらく沈黙があった後、G児が、「そう言えば、うちの兄ちゃん、学校で虫メガネを使って火を出したって言っていた」と話してくれる。さっそく隣のクラスから虫眼鏡を借り、試してみることにする。しかし、この方法もこれまでと同様、煙が出るが火にはならない。

翌週も「黒い紙でやるといいらしい」「綿(ワタ)もいって。虫眼鏡で光を集めたら布団が焦げて火事になった家があるんだって」とお家の人から聞いてきた話をする子どももいた。「それなら綿を置けば燃えるかも」と期待して挑戦するものの、モクモクとかなりの煙が出て紙に穴が開くのに、火にはならず。

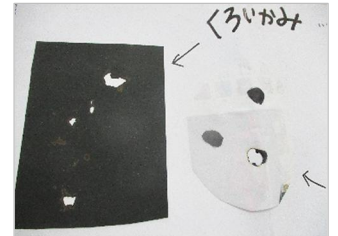
しかしすぐには諦めず、お日様を追いかけ、最も日差しが集まる場所を探してみた。「朝は2階の方がよく陽が当たるね」「お弁当のあとは1階の方がお日様強いね」と、陽の傾きに子どもたちが気付いていく。発火に至らないことを迎える保護者に相談すると、H児の母親が「モグサを入れたらどう？」と教えてくれる。

思っていたこと③

- ・虫眼鏡だったら、火がおきるかもしれない。

思わぬこと③

- ・煙は出るけれど、発火はしない。



拓けたこと③

- ・紙に穴は空いた。
- ・陽の当たり方を比べて、火起こしに適した場所を探す。

思っていたこと④

- ・モグサを入れれば、火がおきる。

拓けたこと④

- ・モグサを入れて、虫眼鏡で陽を集めたら、火がおきた！

(4) 待ちに待った火がおきた

翌日、H児がお灸に使っていたというモグサを持参した。「モグサ」のことを調べてみると、ヨモギの葉の裏にある繊毛を精製したものであることを知る。

「確かにフワフワしているね」「火がついたら教えるね」と、発火の瞬間を捉えようとJ児はテラスに寝そべり、床に置かれた紙を見つめる。

黒い紙にモグサを載せ、虫眼鏡で光を当ててみると、「火、火！火がおきた！」とJ児は興奮している。またもやクラスの子どもたち、園中の子どもたちが一斉に集まった。ようやく、火おこしならぬ、火種を作ることになったのであった。

早速、焼き芋をするために必要なことをクラスで相談した。子どもからは、芋が必要であること、竈を作らなくてはいけないこと、枯葉を集めることが挙げられた。「芋は畑にあるから掘ってくればいい」「竈は石で作ろう」「落ち葉は幼稚園で集めよう」とその日から、園庭中の枯葉を集めるなど焼き芋の準備を始める。

考察 [2]

火おこし器で出る煙よりも、はるかに多くの煙を立ちあげた虫眼鏡に、子どもたちの期待は膨らむ。この発煙がきっかけとなり、火おこし器ではなく、虫眼鏡の活用が火おこしの中心になっていく。但し、小学生の兄は虫眼鏡で火がおきたのに、自分たちが試すと煙が出て紙に穴が空くだけだった。麻紐でも綿でも燃えなかった。紙も様々試してみた。黒い紙や新聞紙、黒マジックで塗り潰した紙、鉛筆で塗り潰した紙を用いてみたが、成功しない。家庭や幼稚園にある「黒っぽいもの」を当てるなど、仮説をもって火起こしを実行する姿に、子どもたちの「何としても火をおこしたい」という強い思いが表れた。

冬休みが近づき、試行が可能な時間が迫る。内心焦る担任が保護者に相談し、実現に向けて示唆を得た。そして、ようやく火種を作ることになった。この時はみんなで飛び上がるほど喜んだ。

子どもたちは、日差しの強い場所を探索していたら、時間帯に合わせて太陽の当たる場所が変化することにも気付いていった。火起こしの試行錯誤がもたらした、新たな発見であった。



(5) 芋が足りない?!

枯葉も豊富に集まり、サツマイモを収穫する頃となった。しかし、幼稚園の畑で育てたサツマイモを掘り返したところ、食べられるサツマイモはなんと 10 本にも満たない。子どもたちから「自分たちだけでこっそり食べる?」「でも煙が出るでしょ?他のクラスにばれちゃう」「弟にもあげたい」という声があがる。

「いいこと考えた!集めればいい」というT児の発案に従い、翌日からサツマイモ募集活動を始めた。「サツマイモを集めています。おうちに余っているお芋があったらください」と、クラスの子どもたちが交代で入り口に立ち、呼びかけしている。クラスの保護者のほか職員や他学年の保護者も届けてくれた。ジャガイモやリンゴが入っていることもあった。2日間で、なんと段ボール3箱分のサツマイモらが集まった。

思っていたこと⑤

- ・サツマイモの収穫で焼き芋ができる。

思わぬこと⑤

- ・サツマイモが足りない。

拓けたこと⑤

- ・サツマイモを募集したら沢山集まった。



思っていたこと⑥

- ・竈の近くで火をおこしたい。

思わぬこと⑥

- ・竈の近くは日当たりが悪く、火がおこせない。

拓けたこと⑥

- ・2階で火をおこして、階下の竈に運べばいい。

(6) 火種を消さずに運ぶ方法

いよいよ当日、天候にも恵まれ、絶好の焼き芋日和になった。火おこしチームはどこで火をおこすか朝から悩んでいる。「竈の近くでおこせばいいけれど、ここは日陰だし」「朝の陽は(2階の)テラスで強いから、ここで火をおこして下に運ぶしかない」「消えないようにしなきゃ」「ウチワ持っていく」と、シミュレーションをしている。「火種できた。消えないようにウチワ、ウチワ」と火種を扇ぎながら竈へ向かう。「今から行くから」と竈チームに2階から呼びかける。素晴らしい連携プレーにより、チリチリと新聞紙で燃え出した火種を竈に投入する。大役を果たしホッとしたのも束の間、その火が小さくならないように火おこしチームは一生懸命、ウチワで扇ぐ。煙が目目に沁みても頬を赤くして、火の見守り番をしていた。

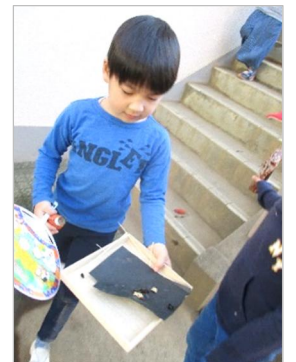
半年にもわたる火おこしの試行錯誤から解放され、ようやく自分たちでおこした火で焼き芋を作り、口にすることができる。「おいしい!」「世界で一番うまい!」「最高～」と、クラス中で何度もお代わりをした。

考 察 [3]

この期に及んで、芋が足りない事態になるとは思いもよらなかった。この危機を子どもたちは自らサツマイモの募集活動を繰り広げ、乗り越えた。

焼き芋当日、火おこしチームは自分たちの役割と責任をよく理解していた。火がおきないと焼き芋はできない。どこが火おこしに最適な場所か、火をおこしたらどう運ぶのか、朝から入念に点検、確認をしていた。幼稚園が火災に見舞われないよう、子どもたちが竈を設置したのは園舎から一番離れた場所である。しかし、そこは陽が当たらず火はおこせない。火がおこせるのは、朝の時間帯では2階のテラスしかない。運搬中に火種が消えないようにウチワで扇ぎながら竈へ火を運ぶという選択をし、実行した。慣れた手つきで日光を捉える姿に、今まで培ってきた技術の確かさや仲間とのチームワークの良さを感じた。

活動当初、子どもだけでなく担任ももっと簡単に火をおこせると思っていた。幾度となくうまくいかないことに出合い、その都度考え相談し乗り越えてきた。この連続する試行錯誤に向かう粘り強さは、うまくいかないことがあっても立ち直り挑戦し続けるという「生きた経験」をもたらすことと思う。



A. 丁寧に作らないと返される〔5 歳児〕

(1) 車が動いた —— 車作りの始まり

「ほら見て、車、作った！」と、K 児が制作したばかりの車を、保育者に嬉しそうに見せに来了。K 児は 4 歳児の時から乗り物を好んでよく制作していた。今回の車の胴体はティッシュペーパーの箱で、これに、タイヤに見立てたペットボトルの蓋が両側に貼り付けられている。早速、新作の車を押して動かしている。

しかし、数日、この車で遊んでいるうちにタイヤが押し潰され、取れかかってしまった。保育者が「動くタイヤに挑戦してみない？」と声をかけ、ペットボトルの蓋に穴をあけ、竹ひごを刺し、ストローを通して箱の後ろに張り付ける方法を提案した。K 児はすぐにタイヤを修繕し、テーブルの上で車を走らせた。「できた」「すごい、自分で動いてる」と K 児が喜んでいると、K 児の車に興味をもち、自分も作ってみたいとなった子どもたちが集まってきた。

保育者は子ども同士の教え合いを期待して、「作り方は K 児が知っているから K 児に聞いてごらん」と伝え、K 児は「キャップ 4 個とストローと竹ひご持っておいで」と張り切って教え始めた。すぐに A 児、B 児、C 児、D 児が制作に取りかかった。K 児に作り方を教わりながら、それぞれが自分の車を作っていく。



思っていたこと①

- ・自分で作った車を走らせて遊びたい。

思わぬこと①

- ・作ったばかりなのに、すぐにタイヤが潰れて取れてしまう。

拓けたこと①

- ・動くタイヤにしたら、よく走るし壊れにくい。
- ・車作りの仲間が増えた。

(2) こんなものはない —— 売った車が返品される

車作りが楽しくなって次々と新車を制作し、数を増やしていった。車を走らせるために板状の段ボールで道路も作り始め、保育室やテラスに道を拡張していく。さらに、本を見ながら様々な形の車を作り続けたために、いよいよ飾りきれないほどに車が増産された。A 児の「お店屋さん、しようかな」との言葉をきっかけに、これまで作り貯めた車を販売することにした。

次の日、制作した車を保育室の入口に並べて、「車屋さんをしまーす。お財布を持って、来てくださーい」と、3 歳児クラスに声をかけに行った。買いたい子がすぐに来てくれて、品物は完売し喜んでいたら、意外なことが起きた。車を買ってくれた 3 歳児が戻ってきて、「こんなものはない！返す」と投げ返してきたのだ。A 児が返品理由を尋ねると、「壊れているから」という答えが返ってきた。「直すよ」と修理を申し立てるが、3 歳児に「そんなものはない！」と押し切られてしまった。それだけでなく、ほかの 3 歳児からも「これじゃない、壊れているから」と返されてしまう。返品されたのは二つとも、A 児が作った乗り物である。落胆し肩を落とす A 児に対して、K 児が「丁寧に作らないからだよ。丁寧に作るってことは、かっこよく作るってことだよ」と声をかける。A 児は作り直して、先ほどの 3 歳児に届けに行く。

思っていたこと②

- ・車を売ったら、買った人は楽しく遊べて喜ぶだろうな。

思わぬこと②

- ・売った車が壊れていると言われて、返された。
- ・なんで、自分のだけ返されるのかな。

拓けたこと②

- ・丁寧に車作りを心がける。
- ・車を修理して持ち主に届ける。



考 察 [1]

子どもたちは 5 歳児らしく車作りを少し高度化させ、制作意欲を高めていった。そのような折、制作し販売した車を返されるという出来事が起きた。A 児にとっては思いもよらないことで大きく落胆していたが、K 児のアドバイスに納得し、諦めずに作り直して届けることができた。この出来事は相手のことを考えて丁寧に作ることの大切さを知る機会となり、その後の A 児の車作りを変化させるきっかけになった。

(3) ここ、増やしてみたんだ！——気付いたことを作り足す

2学期になると、車作りは、車の改造に力点が置かれるようになった。

お気に入りの車は毎日のように何かしら手を加えられた。車の色や形だけではなく、窓の開閉を可能にしたり、トランクやボンネット、バックミラーを付けたりして、細部へのこだわりがみられる。紙を小さく切って人型を作り自分に見立てて乗せてもいる。子ども同士教えあい、お互いに刺激し合って制作は進む。作っては遊び、遊びながら気付いたことを作り足しながら、車は改造されていく。

乗車させていた紙の人形はすぐに行方不明になってしまう。そこで、素材を紙粘土に変えると、自分や家族の人形が登場した。すると彼らの座席ができ、ドアを開閉したり、シートベルトをつけたりして、車はより本物らしく改造される。



(4) 自分の好きなミニカーにしようよ——コースを作る

クラスのミニカーを使う子が増え、ミニカーの取り合いが起きた。これをきっかけに、保育者の提案を受けて、子どもたちは紙粘土でミニカーを自作し始めた。

レーシングカーを紙粘土で作る子も増えていた。そこで、ミニのレーシングカーを走らせるためのレース場が必要となった。本物のレース場のパンフレットを見ながら牛乳パックを細長く切り、板状の段ボールを貼りコースを作り、レース場を生み出した。タイヤを動かしたいとの思いから試行錯誤した結果、ボタンで型取りして厚いボール紙を丸く切り抜き、乾く前の紙粘土にストローを刺し、そこに爪楊枝で張り付けたタイヤを通して、車輪が回転するようした。3歳児や4歳児がレース場に来てくれることが嬉しくて、自分のミニカーを貸す子もいた。

他方、自作の車を遊びで使わず、制作に留まる子もいた。紙粘土の車は空き箱の車のように改造できず、動きも単調だった。

思っていたこと③

- ・自分のミニカーやコースが作れる。取り合わずに済む。
- ・レース場も作って、遊びが広がる。

思わぬこと③

- ・紙粘土の車は改造ができないし、車の動きも単調だ。

(5) 中身を作ることにした——作っては遊び、遊んでは作る

車作りに夢中になっていたK児、A児、C児、E児の4名は、細かい部品の再現に挑む。K児やA児は車好きの父親の影響を受け、メンテナンスの作業を共に進めた。見せ合いや教え合いを通して、「次はこうしてみよう」「ここも作ってみたい」という新たなめあてを得て、エンジンやワイパー、ギアなども作り出した。

家庭での見聞を園で再現することにも意欲的だ。本物の車のタイヤは車体に収納されていることを知ると、自分の車も切り開いてタイヤ収納ができるように作り直す。1台の車に十分に手をかけ、より本物らしく見えるように考えて精巧に作り込んでいく。部品の作り方を仲間に丁寧に教え、分からないことは図書室で調べる。遊び込んで傷んでしまっても、自分の車に愛着をもち修理を繰り返す。丈夫に作ることを意識しつつ、改造や精密化など形の変化を楽しんでいる。

拓けたこと③

- ・空き箱で車を作り、改造する。
- ・本物みたいに、細部にこだわり改造する。
- ・本物らしく見えるように精密に作り込む。

考察 [2]

試行錯誤しながら自分の手で車を作りだすことを楽しんでいた。仲間同士、工夫したところを見せ合い、それが次作への意欲をかき立てた。空き箱での車制作に自信がない子にとってミニカー作りは魅力的だったが、改造の余地が乏しく、制作好きの子にとっては物足りなかったようだ。K児らは自分で考えたことを精巧に作りあげること続け、部品など細部へのこだわりも見せた。制作過程での試行錯誤や発見を楽しんだり、制作した車を試走させたりして、さらに丈夫でよりよい車を作ることにこだわっていた。

(6) 喜ぶものを作ってあげよう ―合言葉は「丁寧に作らないと返される」

クラスの活動として「たか1まつり」を開催することになった。具体的な計画を話し合ったところ、喜ばれるものを作り、お店屋さんとして売ることになった。コマやケーキ、人形、動物、虫、車など販売品が決まっていくなかで、A児がクラスに切り出した。「壊れないように、丁寧に作らないと返されるよ。あれは僕すごいショックだったから…」。

3歳児から返品された出来事を知る仲間たちには、A児の言葉には重みがあった。クラスの全員、作った商品が壊れないかゆすって確認したり、テープでしっかり留め付けたりして、丁寧に丈夫に作りあげるように心がけた。車作りのメンバーもお互いに直したほうがいいところを教えながら制作を進めていた。1か月間かけて品物を作っていくうちに自分の制作物に愛着をもち始め、「売りたいなくなってきた」という声が漏れる。同時に、自信作ゆえに、「でも、人気で一番最初に売れちゃうかもしれないよね」という期待も見せる。それぞれが自分の得意としている制作物を3歳児や4歳児のみんなが買えるように、園児の人数分を超える数を作るという目標をもって取り組んでいった。

おまつり当日は大繁盛した。自作の品物が売れると「やったー」と仲間と喜び合った。車屋さんは売れ行きがよく、3歳児を招いた段階で品薄となり、4歳児に販売する商品がほとんどなくなってしまった。そこで悩んだ末に、長いこと手をかけ愛着があり非売品としていた車のいくつかを売って手放すことにした。それでも買えなかった子のために、次の日から予約販売を始め、注文品を制作し配達した。注文が増えても「かっこよく作らないといけない」と互いに声をかけ合い、一つ一つ丁寧に作り、聞きにきた子にはやさしく作り方を教えていた。自分たちが作った車を喜んでもらえることが嬉しくて作り続ける姿があった。

車を返しにきた子は一人もいなかった。



思っていたこと④

- ・小さいクラスが喜ぶものを作ってあげよう。

思わぬこと④

- ・また、返されたらどうしよう。

拓けたこと④

- ・壊れないように、丁寧に作れば返されない。

思っていたこと⑤

- ・売りたいくないけど、売れるかな。

思わぬこと⑤

- ・売れ行きがよくて、品物がなくなってしまった。

拓けたこと⑤

- ・非売品の愛車も喜ばれるなら手放そう。
- ・注文をとって予約販売にしよう。

考 察 [3]

1年間、蓄積された経験が活かされた活動となった。

お店屋さんを開くに当たり、A児の頭には7月の返品された出来事がよぎる。あの哀しい思いを自分もクラスの仲間もしないようにと、自ら留意点をクラスに切り出した。「丁寧に壊れないように作る」ことはクラスのめあてとなり、「丁寧に作らないと返される」を合言葉に制作に臨んだ。安易に商品を揃えればよいわけではなく、買い手のことを考え、どうしたらかっこよく作れるか、返されないで喜んでもらえるのかということを念頭において取り組めた。

仲間とめあてを共有し協働して取り組む充実感と、売り切れたという達成感によって、大きな喜びと自信を得た。非売品の愛車まで手放し、喜んでくれる人たちのために車を作り続けたり、自ら編み出した作り方を教えてあげたりするなど、他者を思いやり、他者の喜びを自らの励みにするという体験も得た。

より本物らしくしたいというこだわりをもち、精巧に作り込むことも長期間続いた。1年間で直面したいくつもの「思わぬこと」は、子どもたちに車作りとの向き合い方や、車作りを通した新たな交流に導いた。



B. 自分の車も動くようにしたい〔3歳児〕

前掲のような、5歳児の車作りに刺激されて、3歳児クラスでも車の制作が始まった。

1月初旬、5歳児の数名が空き箱で作った車を連日、3歳児に見せに来てくれていた。細かく作り込んでいる車と、「今度はこうしたんだよ」と工夫を語る姿に、3歳児の子どもたちは「すごい」と5歳児に憧れのまなざしを向けていた。

このクラスは、これまでも自発的になにかしらの制作によく取り組んでいた。2学期には乗り物作りに熱中し、高速道路を作ったり、5歳児のレース場を真似して自分たちでもコースを作り出したりして、それぞれの車を走らせていた。この時、走らせていた車は、空き箱の両側にペットボトルのキャップや小さいカップを直接、張り付け固定させたもので、車体ごと自分で動かして遊んでいた。

1月後半、この日も5歳児が車を持って訪問してくれた。その車の車輪が回転するところを見たP児とQ児は「これ(自分の車)も動くようにしたい」「でもどうやるの?」と言い出した。それを聞いた5歳児のK児が「タイヤはこうなってるんだよ」と説明し、実際に作り方を教えてくれることになった。「キャップ4つとストローと竹ひごがいるんだよ」と言われ、3歳児の二人は材料を探し始めた。キャップが見当たらず、P児が大量にあったプリンのカップを「これならあるんだけど」とK児に差し出すと、「それでも大丈夫」と言ってもらい、安心して作り始めた。

一つ一つ丁寧に教えてくれるK児の説明を聞きながら、3歳児は自分で試してみたり手伝ってもらったりして、ついにタイヤの回転する車が完成した。P児もQ児もとても嬉しそうな表情になり、早速、二人で部屋中を走らせていた。

「あれやりたい」と集まってくる他児たちにも、K児は順番に教えてくれた。3歳児が「できない」と訴えると、「こうするんだよ」「やってあげるよ」と5歳児が手伝ってくれる。お陰で、多くの子どもが完成させることができた。「外で走らせたい」というR児の要望に、5歳児は園庭に車を持ち出し一緒に走らせてくれた。

車輪が回転し、車らしく動くようになったことで、今度はその日から道路作りが再び始まった。周りにお店や信号を作ったり、車にこだわったりしていった。まだ車輪を回転させられていなかった子が「動くようにしたい」と言って、自ら5歳児の部屋に出向いて教えてもらおうなど、5歳児との交流は年度末まで続いた。

思っていたこと⑥

- ・車体を持てば、直付けの車輪でも車は動く

思わぬこと⑥

- ・車輪が回転するから、車が動くのか。今までのやり方は違っていた。
- ・でも作り方がわからない。

拓けたこと⑥

- ・分からないことは、5歳児に教えてもらおう。



考 察

2学期は、空き箱の車体に直貼りした、回転しない車輪に満足していた。自分で車体ごと移動させることで、車が「動いている」と思い込んでいた。

しかし、5歳児の精巧な車を目撃し、車輪が回転していることに気づき、「自分の車も『本当に』動くようにしたい」という願いが生まれた。5歳児に作り方を教えてもらったり、自分だけではまだ難しいところは手伝ってもらったりして、「できた」という喜びや満足感を得ていった。

3歳児にとって、制作や車など共通の関心をもつ5歳児の言動の影響は大きい。5歳児も自分の得意なことを張りきって教え、年少の子に丁寧に関わってくれた。そこで、保育者は直接、子どもに教えるのではなく、3歳児が5歳児とやりとりしやすいように仲介した。異年齢との関わりから、子どもたちの気づきや発想、経験が豊かになり、遊びが拓かれていった。



Ⅲ．総合考察

前章における事例の検討をふまえ、本章では、まず、子どもの経験として「思っていたこと」－「思わぬこと」－「拓けたこと」の過程、すなわち、「思わぬこと」から遊びが拓く過程を捉える。次に、その過程で果たされている保育者の援助について示す。さらに、「思わぬこと」から遊びが拓く過程が、いかに科学する心を育てるか、述べる。(次頁の図参照)

1. 「思わぬこと」から遊びが拓く過程

第Ⅱ章の各事例において、「思わぬこと」から遊びを拓く過程において、子どもは次の経験をしていた。

一つには、「期待」と「期待外れ」である。事例「緑のトマトは採っちゃだめ、赤いトマトは採っちゃだめ」にみられるように、赤いトマトを無事収穫したい、美味しく食べたいと子どもは期待していたが、落下や食害、不味い緑のトマトジュースといった期待外れを経験した。この期待外れによって、無事収穫するための工夫や、美味しいトマトジュースを飲むことの貴重さを経験した。

二つには、「技能」の習熟である。事例「のり巻きの中身、抜けちゃった」のように、紙を巻くことは簡単でも、のり巻きとして中身を定着させるには、しっかり巻いたり、テープでこまめに留めたりするなどの技能が必要であった。それは、子ども同士の教え合いにもよく表れていた。

三つには、「葛藤」である。事例「今度は別々にしよう」のように、子どもたちは、羽化したばかりの蝶を生かすことと、カマキリを生かすこととの間で葛藤した。しかも結果は、どちらの命も失われるという「思わぬこと」だった。この葛藤から、カマキリと蝶は別々にして、それぞれが生きられるようにという願いは、子どもたちにとって切実なものとなった。

四つには、「安全性」である。事例「新幹線かがやき、ただ今、整備中」のように、安全な運行をテーマに、車両点検や内装、感染対策、装備など細やかに配慮し、乗車や運転よりも整備を遊びとした。

五つには、「重さの感覚」である。事例「手で持った感じと違う」では、具材の野菜の重さについて、見た目と、手で持った感覚と、実測値では異なることが思いがけないことだった。調理体験を重ねて、計量と目分量との異同を経験していくことになるだろう。

六つには、「試行錯誤」である。事例「煙は立つけど、火はおきない」では、「火をおこす」という目標をクラスで共有し、石や木、火おこし器、虫眼鏡、モグサとよさそうなやり方を試し、徐々に改善を図り、最終的に火おこしに成功した。本来的な意味での試行錯誤の事例といえよう。

七つには、「こだわり」である。事例「丁寧に作らないと返される」にみるように、自分が作った車を売ったら3歳児に返品されるという予想外のことに出会ったことをきっかけに、5歳児の子どもたちは車作りに真摯に向き合い、車の細部に至るまで壊れないように丁寧に作り、最終的に売り切れ状態に至った。「思わぬこと」によって大きく落胆したが、それを受容することで、仲間に一目おかれる存在になった。

八つには、「動きの認識」である。3歳児は、車体自体が移動することについて当初は「動いている」と思っていたが、5歳児との交流によって、車輪が回転することが「動くこと」だと気づき、5歳児の子どもたちに作り方を教えてもらった。

「思わぬこと」から遊びが拓く過程においては、「思わぬこと」に出合うことで、「思っていたこと」が可視化され、その差異によって、その後の遊びの拓かれ方が異なってくる。「思わぬこと」との出合いには驚きや喜び、落胆などの感情が付随するが、否定的な感情であっても「思わぬこと」を受容し、その出来事から何かしらを学び、遊びを立て直せることがその後の遊びが「拓けること」に影響を及ぼすと考えられる。

科学する心

拓けたこと

遊びや出来事が展開し、気付いたり、考えたり、試したりするなど、新たな展望を得たこと

期 待

採られないように工夫する

技 能

テープで留める

葛 藤

カマキリと蝶の共生を考える

安全性

整備の徹底、安全な運行、列車の展示

重さの感覚

見た目との違い

試行錯誤

モグサを入れたら火がおきた

こだわり

壊れないように丈夫に丁寧に作る

動きの認識

5歳児に教えてもらう

保育者自身の受けとめ

揺らぎ、見守り、共感、考える機会

予想外の事態へのアプローチ

問いかけ、見守り、視点の変換、振り返り、子どもの省察

次の展開へのアプローチ

行為の支援、見守り、問いかけ、方法の選択、再挑戦の奨励、技術の伝承

思わぬこと

遊びの過程で遭遇する、子どもにとっての予想外のこと

期 待

トマトの紛失
緑の実是不味い

技 能

中身が抜け落ち切るとばらける

葛 藤

羽化した蝶を食べさせるのか

安全性

内装があると乗り辛い、乗車より整備

重さの感覚

持ったら軽い、測ったら重い

試行錯誤

煙は出るけど、火はおきない

こだわり

売った車が返品される

動きの認識

車輪は回転する
作り方がわからない

行為へのアプローチ

教材研究、機会の設定、実現の支援、家庭との連携、技術の支援

意欲へのアプローチ

期待感の醸成、関心を向ける、共感

思っていたこと

「思わぬこと」に先立つ、子どもの見方や予想、願い

期 待

赤いトマトを採って美味しく食べる

技 能

巻けばのり巻きになる

葛 藤

蝶の羽化が見たい
カマキリに餌をやる

安全性

整備士の格好で内装を作りたい

重さの感覚

料理をしたい。
必要な材料を用意

試行錯誤

火は、簡単におこせる

こだわり

作った車を売ったら喜ぶだろう

動きの認識

動く車が作りたい

図 「思わぬこと」から拓く「科学する心」

2. 保育者の援助

「思わぬこと」から遊びが拓く過程においては、保育者自身が事態を受けとめ、先の展望をもつことを中心に、様々な援助が行われていた。

前ページの図に示すように、第一に、「思っていたこと」から「思わぬこと」への移行において、保育者は、一つには、子どもの行為へアプローチをしていた。すなわち、教材研究をふまえて、子どもが対象と関わる機会を設定したり、技術的な支援を行ったりしていた。家庭と連携し、家庭の協力によって遊びを進展させることもあった。もう一つには、子どもの意欲の醸成と継続にアプローチしていた。期待感を高めたり、共感を通して子どもを励ましたり、子どもの関心を自らの思いに向けさせたりしていた。

第二に、「思わぬこと」から「拓けたこと」への移行において、保育者は、一つには、保育者自身、何が起きているのか、それに自分がどのように関与するのか、事態の受けとめを行っていた。「思わぬこと」は時として、子どもだけでなく保育者にとっても「思わぬこと」となる。不本意なことであったとしても、子どもにどう働きかけるか、即応的に判断しなければならない。一方で、保育者自身の「思わぬこと」への感情もある。従って、自らの思考と行為を省察し、この事態にどう向き合うか、意思決定が求められる。二つには、子どもやクラスに起きた予想外の事態へのアプローチである。問いかけや見守り、視点の変換、振り返りなどを通して、子ども自身が「思わぬこと」をどう受けとめて、この後どうしたいと願っているのか、把握する。三つには、「思わぬこと」に続く、次の展開へのアプローチである。問いかけや見守りのほか、方法の選択肢を示したり、再挑戦を奨励したり、技術的な問題を解決したりすることが考えられる。

3. 「思わぬこと」から拓く「科学する心」

以上より、「思わぬこと」と出合うことで、子どもは自らの「思っていたこと」に気づき、「思っていたこと」を見直しながら、「思わぬこと」を受けとめていた。加えて、「思っていること」と「思わぬこと」の差異は遊びをふり返させ、今後の遊びを拓くことにつながっていた。

子どもも大人も、今、自分が考えることをすぐに表明することは必ずしも容易ではない。「思わぬこと」との出会いは、奇しくも「今、思っていること」を顕在化させ、それが思い込みなのか、確証があるのか、省察させられる。それによって、「思っていること」と「思わぬこと」の差異と価値を見計らい、この先の遊びを拓いていく。人間の思考は、必ずしも、PDCAのように単線的に進むのではなく、意外なことや予想外のことといった、今起きた「思わぬこと」と、これまでの「思っていたこと」を行き来して、遊びが拓かれる未来に向かう。これはまさに、科学者も辿る思考に類似しており、本研究の成果は「科学する心」を誘う取り組みといえよう。

4. 今後の課題と方向性

今後の課題と方向性としては、第一に、「思わぬこと」は保育の中で、どの程度、捕捉できているか、研究を進めたい。第Ⅰ章に示したように、これまでの時代の教育や保育では、見逃されていた見方と思われる。今回の取り組みを契機に、「思わぬこと」がどれほど遊びを深めているのか、実践を通して検討したい。

第二には、「思わぬこと」から遊びが拓く過程を経験した子どもたちには、どのような資質・能力が育成されるのか明らかにし、本園のカリキュラム開発に活かしていきたい。

研究代表 霜出博子（副園長）

研究同人 阿部和香子・大塚美帆・佐藤 恵・高橋敬子・玉井美津・西井宏之・深田美智子・細井佑香・
本橋幸子・本山方子

